(2) 板荷（いたが）鉱山跡ー増補版

本鉱山を久しぶりに再訪した。ＧＰＳであるガーミンで確りと探査ログを得ることを主目的としたのである。当鉱山跡へのルートは前回は図１中では、Ａ－Ｂ－Ｃ－Ｆ－であったが、今回訪問するとＣ点で入った林道の直ぐに、入山を遠慮して欲しいとの看板があり、かつ猪の侵入防止用の扉で林道が閉じられていた。そのため、今回はＣ－Ｄ－Ｅ－Ｆ－Ｇのルートをとった。Ｄ点付近に比較的幅のある側道があったのでそこに車を駐車させ、Ｄ点から歩いた。

Ｅ－Ｆは神社の境内内である。Ｆ点で林道に合流して、後は既報の通り林道を先に進む。が至る所で林道に倒木があったり、沢の水が溢れて、林道をなめた跡があったりで、Ｆ点より先は車での通行不能であった。が、歩行なので、それほど問題はない。倒木を跨いだり、潜ったりしなければならないが。３０分弱でＧ点に着いた。既報の１枚目の写真の所である。前回はここまで車で来れたのに・・・

２０１９年１０月

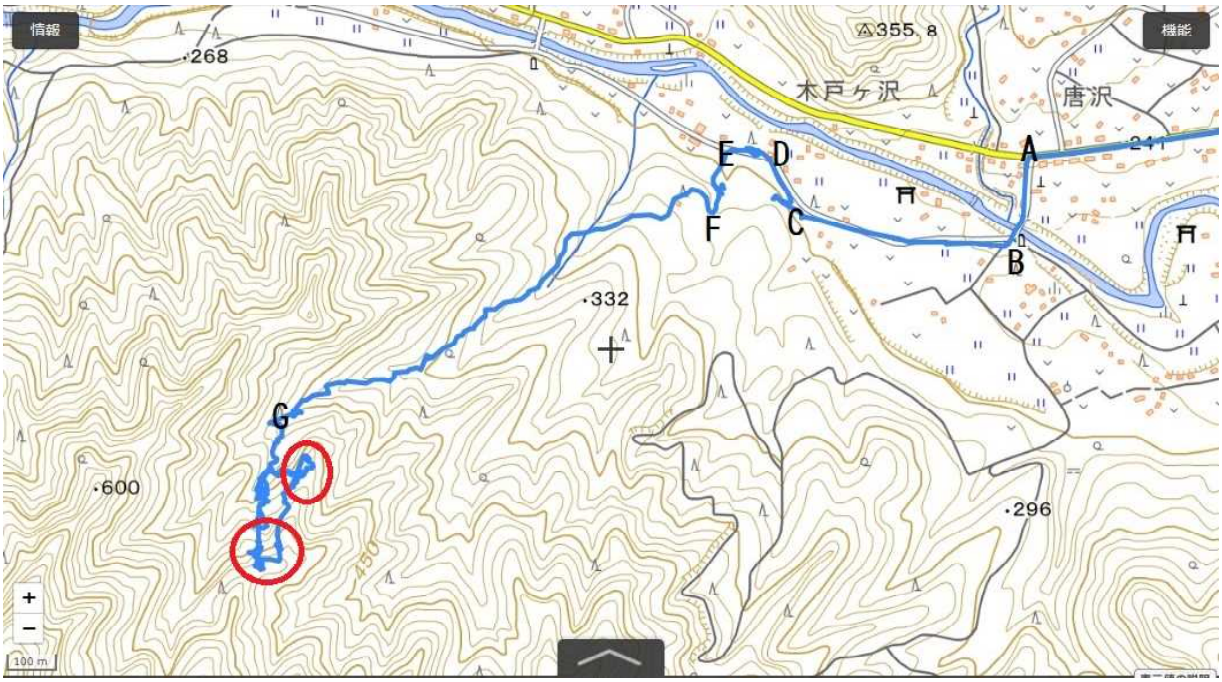


図１　現地の広域図。今回はＤ点に車を置き、徒歩でＤ－Ｅ－Ｆ－と現地に登り上がった。３０分弱か。赤丸２つが鉱山跡。歩いた林道は”荒廃”してしまったと言える。

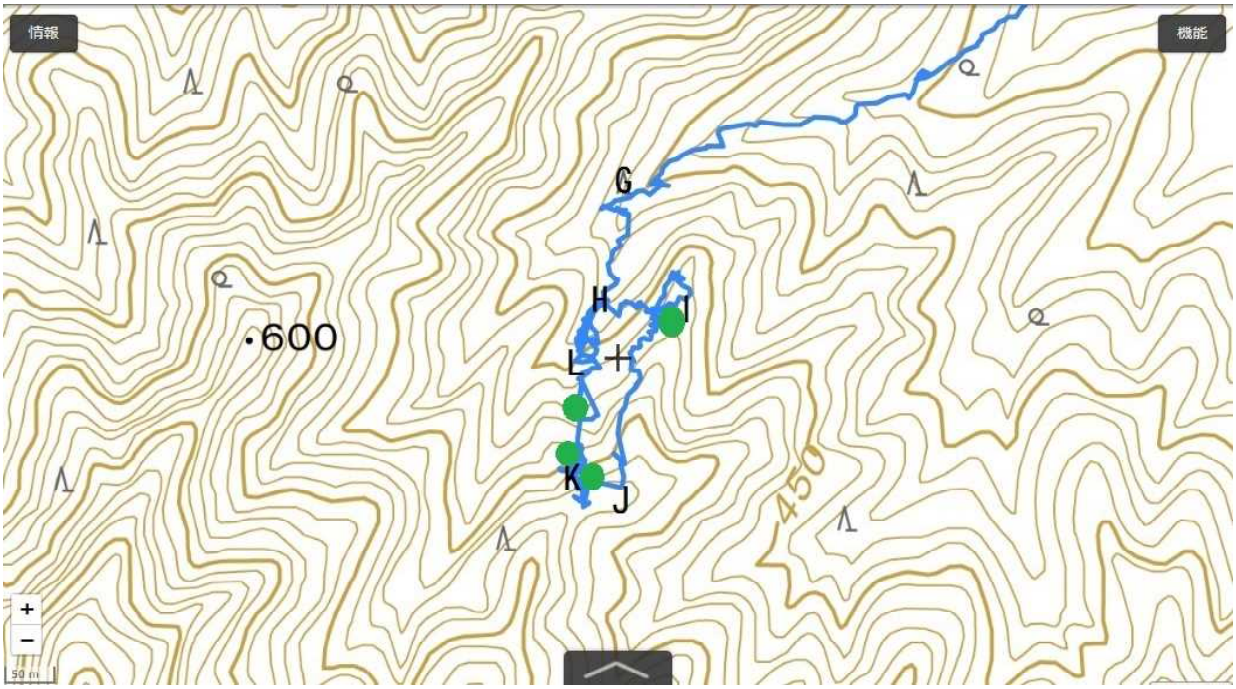


図２　図１の部分拡大図。Ｇ点から林道は少し急になるが、舗装されている。Ｈ付近で左手の林の上向こうにガレ場らしいのが見える。そこを目指して、かすかに残っていそうな山道を登り上がる。Ｉ点である。広範囲にズリが転がっており、坑口跡もある。黄緑丸で示している。後掲している図３の鉱山図と対照するとよく分かろう。Ｉ点から尾根沿いに登り上がり鞍部らしいＪ点に進んだ。石垣組があり、広い鞍部となっている。図３の鉱山図とこれも良く対照できる。Ｊ点から少し下った所、Ｋ点付近で近接して３カ所に坑口跡を見つけた。黄緑丸の所である。この箇所より下部斜面は一面ズリである。図３の通りである。そう言えば、Ｈ点からＩ点までの斜面もズリであった。Ｋ点から広い沢斜面を下り、Ｌ点で林道に合流した。

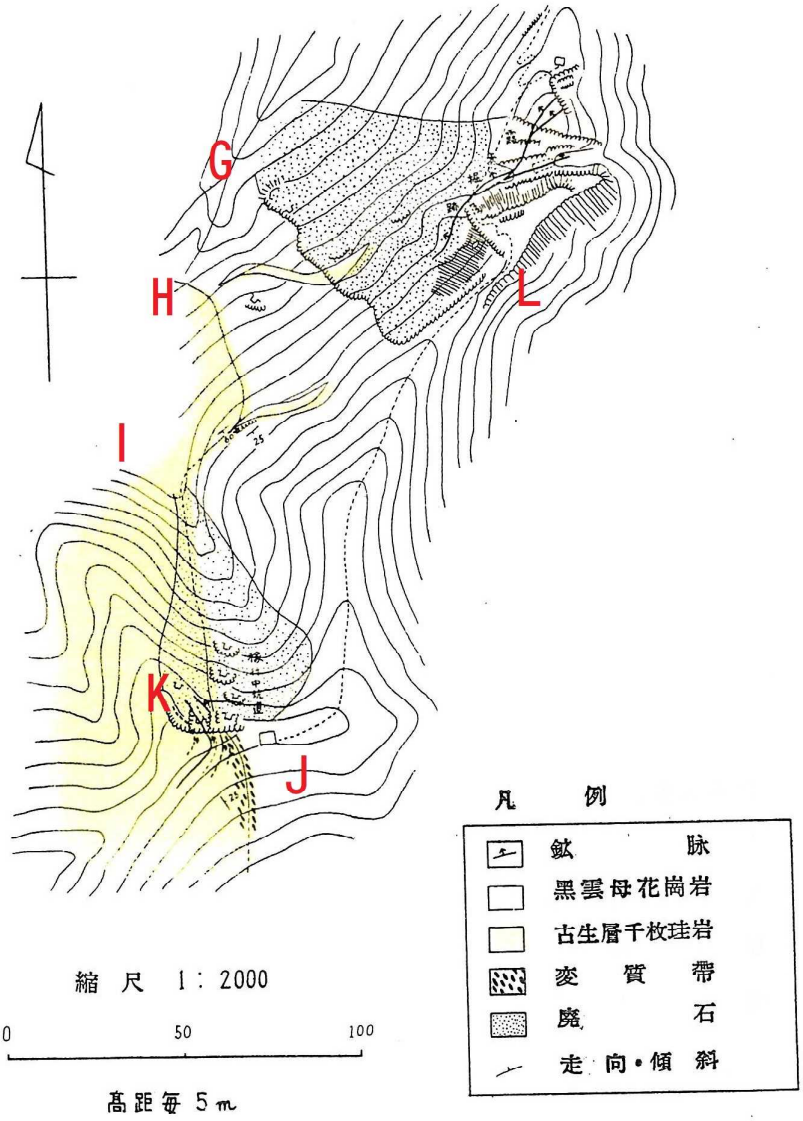


図３　参考文献（２）より。図２と対応しやすいように対応場所に文字を入れている。現在の地形図と良く対応できる。今回確りとこの鉱山図で見られる２カ所の鉱山跡を確認することができた。これらから､現地の訪問経路を決めるのは容易であろう。著者はＧ→Ｈ→Ｌへ、Ｌ→Ｊへ、Ｊ→Ｋ、そしてＬ点で林道に戻った。図で示されているように、一帯はズリだらけである。これらのズリで､腰を据えて採集に取りかかれば､良い標本が採集できるかも。が､表面採集ではもう無理かも知れない､少し表面のズリをどけた方が確かであろう。

鉱山跡写真

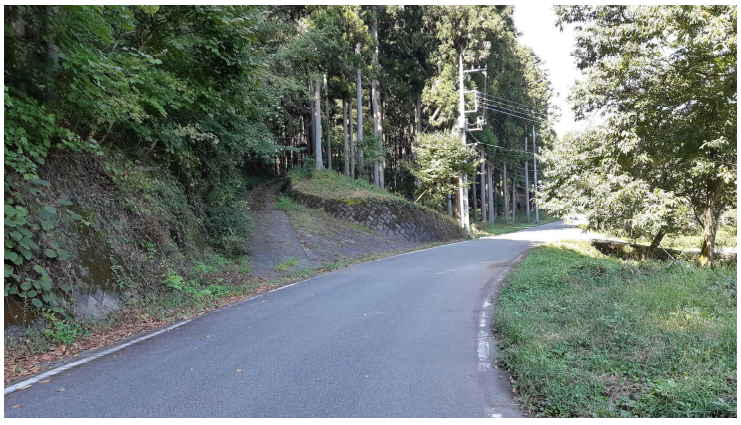


写真１　Ｃ点の所である。前回は前方左側に見えている林道に車で進んで、Ｇ点まで行けた。が、現在、この林道は直ぐに進入禁止である。村道を前方に進むと、左側に神社の石柱門が見える。次の写真を参照。

写真２　村道をＣ点から少し先に来た。Ｅ点である。前方左側に神社の石柱門が見えている。今回はここから歩いた。写真を撮っている場所より少し後ろに道幅に余裕のところ、Ｄ点があったのでそこに駐車した。

写真３　Ｇ点付近の林道の現在の様相。既報の１枚目の写真と同じ視角である。倒木や土砂で林道が覆われている箇所は少なくない。前方にある舗装道の先がＨ点である。全く補修が行われていない。林業作業をする人がいなくなってしまったことを物語っている。近年こような現場を、鉱山探査でよく見かけるようになってきている。

写真４　Ｉ点の所である。周り一帯ガレ場と､ズリである。

写真５　Ｉ点にあった坑道跡。入口の先直ぐで向こう側に抜けていた。

写真６　Ｉ点の所にあった別の坑口跡。既報に掲載していたもの。

写真７　Ｊ点の鞍部の様子。右側奥に石垣組が見える。一帯に人手が加わったよう。

写真８　Ｋ点当たり。写真の中央当たり、垂直な岩盤の根元に隠れているが、坑口跡があった。次写真参照。

写真９　写真８で紹介した所にあった坑口跡の内部の様子。

写真１０　直ぐ近傍にあった坑口跡。

写真１１　上記の坑口跡から、少し下った所にあった坑口跡。

写真１２　その入口から見た内部の様子。

参考文献

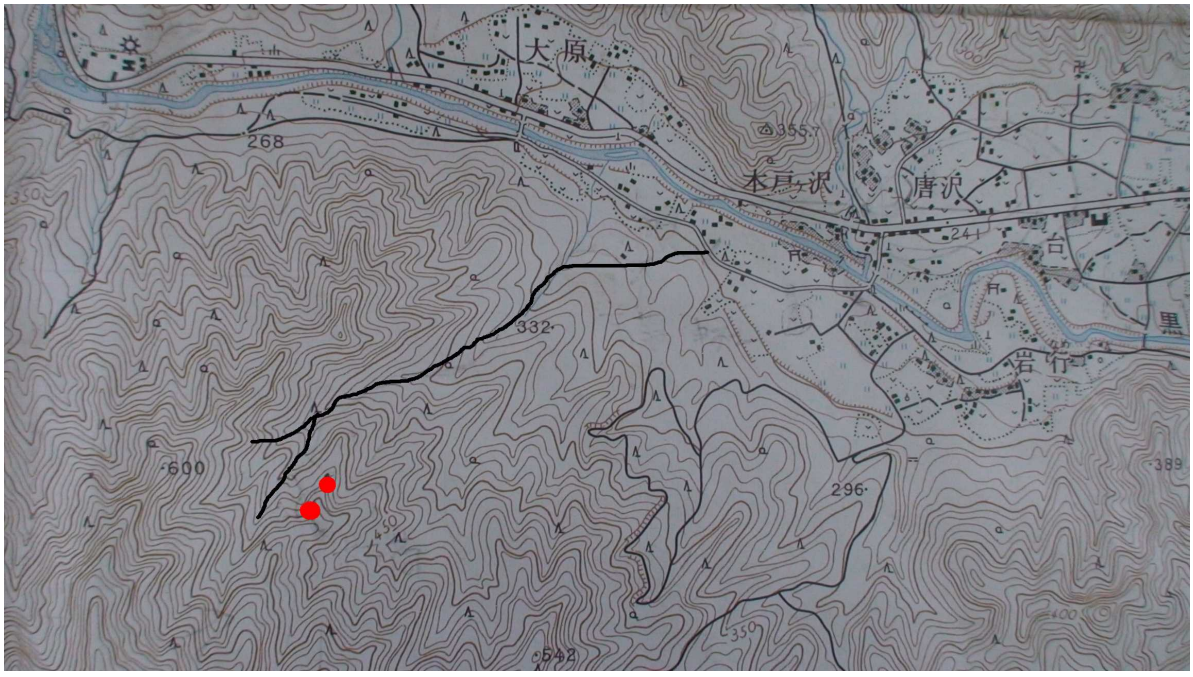
（２）「地下資源調査報告書　第２号」、栃木県、昭和２８年？

(2) 板荷(いたが)鉱山跡

参考文献（１）の案内はやはり古い。国土地理院の２万５千分の１の地図には、肝心の林道は記載されていない。木戸ヶ沢と唐沢地区の間で、黒川に架かっている堂坂橋を渡って直ぐに右折をする。直進をすること３００m～４００mのところで、左側に入り口が急坂の林道がある。この林道を進む。この林道を少し進むと右手に高藤神社の社がある。地図には、この神社は記載されていない。地図に記載されている神社は堂坂橋からの途中にある神社である。高藤神社の後側を通過し、道なりに進んでいくと沢を渡り、左側に曲がり、林道は左側に沢を見ながら登っていく。高藤神社から約１０００mの所で、右手に数台の車が駐車できる空き地がある。林道は直進路と、橋を渡って少し左方向路の林道に分かれている(写真)。沢も２つに分かれている。左側の林道を、橋から約１００m～２００m登った左側が板荷鉱山跡である。

参考文献（１）にはズリが１カ所で、抗跡が１つしか記載されていない。実際は２カ所（地形図中の赤丸。左坑跡と右坑跡としよう）以上ある。林道の左側斜面をじっくり観察すれば、左上に向かっている獣道のような登り道が見つかろう。尾根近くまでの５分～１０分ほどの登りで、花崗岩のズリで一杯の所に達する。この場所を左抗跡としよう。ここに幾つかの廃坑がある(写真)。が、ズリは花崗岩だけである（と私は見ているが)。肝心のタングステンの原石である重石の欠片は全くない。石英の欠片もない。元の道に戻って、更に数十m登ると、左側斜面に涸沢が見え、転石らしいものが林道近くまで散乱しているのが見えよう(写真)。転石を調べながら、ここを登り上がること１０分から２０分で、ズリで少し平坦になった所にたどり着く。右側に廃坑がある。この箇所を右坑跡とした。坑の奥には怖くて入れないが、入り口当たりから観察すると、坑道は左側に向かっているようである（なを、この登りの途中の左側にも崩れた廃坑がある)。更に上にはズリで平坦になった所もある。が廃坑は崩れてしまったのか、正確には確認できない。それらしい崩れの箇所はある。この箇所は先ほどの左抗跡より若干高度が高い。この箇所から左側へ尾根をめざして歩いていく（５分ぐらいか)。尾根に出て、尾根伝いに下ると先ほどの左坑跡の上部にたどり着く。逆に、尾根を１０分ほど登っていくと、尾根の鞍部に鉱山跡がある。この箇所から右坑跡と反対側となる斜面をゆっくりと下りながら周りを探すと、幾つかの廃坑及びズリの跡がある。

ズリで、板荷鉱山の主要鉱石である重石を探した。好鉱物を採集した。板荷鉱山はタングステンを求めて開削されたそうである（参考文献（１))。それにしては、ズリの中にタングステンの原石である重石が全く見つからないのはおかしいと思っていた。本当にズリにはないのである（眼力が未だ乏しいからでもあるか？)。沢の崩れの箇所で、それらしい石を採取した。転石として転がっていた。写真がそれである。結構重い。黒い塊部分には、層状の一方向性の劈開面が見られる。石英の上に成長した、多分鉄マンガン重石であろう。黒い部分の大きさは６ｃｍ×７ｃｍ×厚さ２ｃｍである。やはり板荷鉱山はタングステン鉱山であった。実証



地形図中には林道は記載されていない。大凡で書き加えた。赤丸が坑道跡

地図　　国土地理院２万５千分の１地形図「文挟」
探査日　　２００９年２月、その他の日
参考文献
（１)「鉱物採集フィールド・ガイド」草下英明、草思社、１９８２年

鉱山跡写真

橋を渡って１００ｍ～２００ｍ先の左側が板荷鉱山跡

左坑跡の稜線付近にある坑道跡

谷間の向こうに右坑跡のズリが見える

採集鉱物写真

品名　　鉄重石
化学組成　$FeWO_4$
色　　黒色
光沢　　金属光沢
条痕色
比重　　７．４　　結構重い
硬度　　４
結晶系　　単斜晶系
劈開　　一方向に完全
共生鉱物　石英（SiO_2）、トパズ（Al_2SiO_4（F，OH）$_2$）、蛍石（CaF_2）、
　　灰重石（$CaWO_4$）
解説　　（１）採集場所は東経１３９．６５８８°、北緯３６．６２９８°、
　　標高未定（受信状況不良につき）

鉱石の左右の長さ＝８ｃｍ位。下の白い部分が母岩の石英。上の黒い部分が鉄重石